

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 34 回 第 9.3.1 節～第 9.4 節

2019 年 5 月 15 日

小 田 勝

「9.3.1 補充疑問文の基本形式」の 249 頁の続きから。用例(1)の類例をあげる。

- ・我がここだ偲はく知らにほととぎすいづへの山を鳴きか越ゆらむ [伊頭敝能山乎鳴可將超] (万 4195)

次例は「など+しも+か」という接続例である。

- ・世の中を何に障りてなどしもか法の道には [私ハアナタニ] 今日遅るらん (能因集)
〈能因ノ出家ノ報ニ接シタ輔尹ノ歌〉

引用句中に疑問詞があつて、主文全体が疑問文になる形式がある。

- ・「何事のいつあるべし」と思ひてかかかる憂き世につれなかるらん (続古今 1707)

「9.3.2 係助詞を伴わない補充疑問文の文末形式」の 250 頁、用例(5)～(11)の類例を追加しておく。

- ・年ごとに友ひきつらね来る雁をいくたび来ぬと問ふ人ぞなき (躬恒集)
- ・織女に問ひて知らなむ秋の野の花の錦をいくよ織りつと (元輔集)

次例は歌謡の例である。

- ・熊野へ参るには 紀路と伊勢路の何れ近し (梁塵秘抄)

「9.3.4 補充疑問文と係助詞「や」」の 251-252 頁、用例(3)～(9)の類例を追加する。

- ・ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方にしあるらし (万 574)

「主語+は+疑問詞」の句型もある。

- ・「これはいくら」と問ひければ (宇治 14-6)

用例(11)～(14)に関連して、「いかなり」のような疑問詞を語素とする活用語が単独で(上に係助詞がなく)文末に置かれた時、その活用形はどうなるのかという問題があるのだが、実例が得られず、今のところよく分からない。『落窪物語』の「いとかうしも思いたるは、いかなる。」(新全集 41 頁)も本文に問題があるようである(大系本は「いかなるにか」)。したがって、例えば、有名な次例の下線部は何形と考えたらよいの

かよく分からない。

- ・少納言よ、香炉峰の雪、いかならむ。(枕 280)

私どもの『旺文社全訳古語辞典』では、第3版まで、この文末の「む」を「終止形」としていたが、「いかなり」の終止形終止法の用例が得られないことも考慮し、第4版以降では「む」を「連体形」としている（「いかならむ」の項。当然連体形ではないかというかも知れないが、用例(11)～(13)をみても、問題はそう簡単でないことが知られるだろう）。

253 頁「9.3.5 不定語」。用例(1)～(3)の類例を追加する。

- ・誰ごとに(=人毎ニ)植ゑてけるかなももしきの大宮に咲く千代の菊花(大式高遠集)
- ・何事に(=何事カニ)とまる心のありければさらにしもまた世のいとほしき(新古今 1831)

また、「不定語+と+なく」の形で「どれも皆」の意を表すことがある。

- ・いづれとなく(=ドノ人モ皆)、さまざまに清らに、うつくしげにおはする、うつくしう見奉り給ふ。(うつほ・楼の上上)

用例(9)の類例を追加する。

- ・いかにうつくしき君の御され心なり。(源・少女)〈夕霧の手紙を見た惟光の詞〉
 - ・あなものぐるほし。いかに(=ナントマア)よしなかりける心なり。(更級)
 - ・この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。(土佐)
- 第 9.3.5 節の後に、節を追加する。

9.3.6 従属節中の疑問詞(新設)

従属節中に疑問詞があつて、全体として問いまたは疑いの文を作る句型がある。

- (1) 白妙の花の袂の露ならでいかに結べば心解けぬぞ(大式高遠集)
- (2) 山高み幾年積める雪なれば頭の白く見えわたるらん(大式高遠集)
- (3) 何事にとまる心のありければさらにしもまた世の厭はしき(山家集)
- (4) ふるさとのよもぎは宿の何なれば荒れ行く庭にまづ茂るらん(山家集)
- (5) 秋吹くはいかなる色の風なれば身に染むばかりあはれなるらん(詞花 109)
- (6) 世をばさて何ゆゑ捨てし我なれば憂きにとまりて月を見るらん(続拾遺 608)

「9.4 選択疑問文」の 254 頁。次例は、用例(7)(8)の句型の散文の例である。

- ・孔子に問ひ申すやう、「日の入る所と洛陽と、いづれか遠き」と。(宇治 12-16)